

紡ぐ軌跡

青倉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

猟兵团に拾われて育つた二人は、ある日猟団が解散することになり、気がつくと他の
団員は皆二人を残して消えていた。

知り合いの遊撃手に連れられトールズ士官学院に通うことになつた二人はこれから
様々な出会いと経験をしていく。

序章

トルズ士官学院

目

次

序章　トルズ士官学院

七耀歴一二〇〇年

エレボニア帝国 北ラングドック峡谷

「団長、人倒れてる」

「おいフイー、こないな場所に俺ら以外の人なんて居るわけないやろ」「ゼノ、嘘じやない、団長あそこ」

「格好からみて同業では無さそうだが、おい坊主、意識はあるか？名前は？」

「…ル…ルド…ガ…」

「ハハハ、何かの縁だお前ら、こいつを連れて今日は帰るぞ!!」

これが俺『ルドガー・ウイル・クルスニク』と獵兵团『西風の旅団』との出会いであり、俺にある最初の記憶だった。

——それから四年後

公都バリアハート行き旅客列車の中に二人の男女の姿があつた。

『本日はケルディック経由。バリアハート行き旅客列車をご利用頂きありがとうございます』

七

トリストラ、トリストラ

「懐かしい夢を見たなつと、フリー起きろ降りるぞ」

そう言つて、車内アナウンスを聞き目を覚ましたルドガーは、寝ているもう一人の連れに声をかけた。

ん、眠い、ルドガー連れてつて

いや、頼むから自分で歩いてくれ

一
人む

二人がそんな問答をしていると、

『まもなくトリスタに到着致します。なお、停車時間は1分となつておりますので、お降りのお客様はお忘れものの無きようお気をつけ下さい。』

「そろそろ行かなきや、ルドガー置いてくよ」

フリーはそういうとさつきまで起こそうとしていたルドガーを置いて一人で降車していった。

「おいちよつとフイー！…
はあ」

《近郊都市トリスタ》

帝都ヘイムダルから鉄道を利用して約30分程度の距離にある近郊都市で、有名なトルズ士官学院があり学生街として的一面も持ち、咲き誇ったライノの花が街を飾つてゐる

「ふう追い付いた、あんまり遠くに行つて迷子になるなよフイー」

「ん… そこまで子供じやない」

「ごめんごめん、それにしてもフイー気づいたか」

「もち、赤い制服の人がほとんどいない」

二人が回りの学生服を見てみると緑色の制服が多く、ルドガーやフイーが着ているような赤色の制服を着ている学生はほぼ見当たらないのだ。

「まあその辺はサラに聞けば分かるだろ」

「そだね… ルドガーアは…」

「ん？」

「ルドガーアは団の皆みたいに居なくならないよね？」

「ああ、あのとき約束したろ一緒に居るつて」

そう西風の旅団に拾われた俺がフイーと一緒に、ここトルズ士官学院に入学することになるなんて、数ヶ月前には予想にもしなかつた…

今から数ヶ月前 サザーランド州にて

そこでは獵兵团《赤い星座》と《西風の旅団》の団長である《闘神》と《獵兵王》の一騎討ちが繰り広げられていた。

二人の激しい闘いは三日三晩続き、相討ちという結果で終わつた。この一騎討ちが終わつた後、ルドガードが目を覚まし気がつくとど…「あれ? 皆どこ行つたんだ?」

他の団員達はルドガードとフイーを残して皆忽然と姿を消してゐた。
「フイー起きてくれ、皆はどこ行つたんだ?」

「皆ならそこに… あれ?」

「その様子だとフイーも知らないみたいだな」

寝る前まではそこにいたはずの団員達が消え、団長も死んでしまつたため二人はどうしていいか分からず暫く呆然としてしまつた。

「(皆がいなくなつてしまつたが、俺はこれからどうして行けばいいのだろうか)」

ルドガードがそんなふうに思つていると隣にいたフイーから袖を捕まれつつ質問され

「ルドガーも何処かいいっちゃうの？」

それは父親同然の団長と家族だつた獵団の皆が居なくなつてしまつたことにより、普段の少女とは違ひ、何処にでもいる普通の子供が不安からする問い合わせだつた。

「（獵兵と言つてもこの子はまだ子供なんだ俺が守つてやらないと）」

ルドガーはそう思い、フィーの頭を撫でながら優しく声をかけた。

「お前を置いていくわけがないだろ、約束する勝手に居なくなつたりしないつて」

「… うん」

「（とは言つたもののこれからどうするか… お金もそんなにないし… 何処かで料理人にでもなるか？）」

ルドガーがフィーの頭を撫でつつこれからのことを考えていると、一人の女性が声をかけつつ近寄ってきた。

「はーいお二人さん、どうやら困つているようだけど良かつたらおねーさんとこない？」

突然のことについにフィーを庇いつつ警戒しながら声の主を確認すると、そこには以前ちよつとした小競り合いで知り合つた遊撃手のサラ・バレスタインがいた。

「驚かせないで下さい、それにどうして貴女について行かなければならなんですか？」

「だつてあんた達行く宛てなんてないでしょ？知らない仲でもないし、このまま放つて置くのもなあつて」

「ぐつ… 確かに行く宛てはないですが…」

「それに獵兵育ちのあんた達に常識が足りてるとも思えないし、まあ悪いようにはしないからとにかく一緒に来なさい！」

こうしてルドガードとフイーはサラに無理やり連れて行かれ、気がつけばトールズ士官学院へと入学することになつていた。

——時は戻りトールズ士官学院前

「ぐ入学おめでとーうございます。ルドガード・ウイル・クルスニク君とフイー・クラウゼルさんでいいんだよね？」

二人の男女がそう言つて話しかけてきた。

「確かにそうですが、どうして俺達の名前を？」

「案内書にあつたと思うけど僕達はここで申請したもの預かっているんだ」

「そうでしたか、お疲れ様です。ではどうぞ」

「ん」

「確かに、後でちゃんと返されると思うからそこは心配しないで」

「入学式はあちらの講堂であるから真っ直ぐ進んで。ではお二人とも、トールズ士官学院へようこそ！」

——以上で第215回入学式を終了します。以降は入学案内書に従い、各クラスへ移動してください。以上、解散。

「指定されてクラスなんてあつたか？」

「そんなの無かつたはず……」

「二人がクラスが分からず何処に行けばいいのか話していると、サラの声が聞こえてきた。」

「はいはーい赤い制服の子達は注目、クラスが分からなくて困っているようだけど、ちょっと事情があつてね、これから君達には『特別オリエンテーリング』に参加してもらいます」

赤い制服きた他の生徒から疑問の声が聞こえてくる中
「取り敢えず私についてきて」

そう言つてサラはさつさと講堂を出て行つてしまつた。

「取り敢えずついて行くしかないか」

そうして各々思うことはあるもののサラについていった。これから始まるオリエンテーリングがあんなものだとはまだ誰も知るよしもなく……